

春期福音特別集会（2）（京都）

新約聖書の聖霊

——マタイ、マルコ、ヨハネ、使徒行伝、ロマ、コリント前、他——

1991年5月19日

小池辰雄

私の伝道は失敗 霊の霊止 全的は無的 キリストの勝利は載っている 一遍上人 圧倒されて生きている 六字名号一遍法 キリストの中に捨てる 十字架と聖霊 祈りは「主さま！」
 一つ 存在的伝道が一番大事 聖霊の人にもうなっている 常燃の火に燃やす 霊法 肉と霊
 愛・歓喜・平安 寛容・仁慈・善意 忠信・柔和・節制 詩「ペンテコステの歌」

【マタイ】

「18 イエス・キリストの誕生は左のごとし。その母マリヤ……聖霊によりてみごもり、……²⁰……その胎に宿る者は聖霊によるなり。²¹……汝その名をイエスと名づくべし」（マタイ1・18〜21）

「11 我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも力あり、……彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん。」（マタイ3・11）

「16 イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。¹⁷また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』（マタイ3・16〜17）

「²⁰これ言うものは汝等にあらざ、其の中において言いたもう汝らの父の霊なり。……²²又なんじら我が名のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐え忍ぶものは救わるべし」（マタイ10・20〜22）

「³¹この故に汝らに告ぐ、人の凡ての罪と瀆^{けがし}とは赦されん、されど御霊を瀆すことは赦されじ。³²誰にても言をもて人の子に逆う者は赦されん、然れど言をもて聖霊に逆う者は、この世にても後の世にても赦されじ」（マタイ12・31〜32）

「⁵⁴己が郷にいたり、会堂にて教え給えば、人々おどろきて言う『この人はこの智慧と此等の能力^{ちから}とを何処より得しぞ。⁵⁵これ木匠^{たくみ}の子にあらずや、其の母はマリヤ、其の兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや。⁵⁶又その姉妹も皆われらと共に非ずや。然るに此等のすべての事は何処より得しぞ。』⁵⁷遂に人々かれに躓けり。イエス彼らに言いたもう『預言者はおの



が郷、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』(マタイ13・54〜57)

〔46〕……わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし』(マタイ27・46)

〔18〕イエス進みきたり、彼らに語りて言いたもう『我は天にても地にても一切の権を与えられたり。19 然れば汝ら往きて、もろもろの国人を弟子となし、父と子と聖霊との名によりてバプテスマを施し、20 わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教えよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり』(マタイ28・18〜20)

【マルコ】

〔39〕イエス起きて風をいましめ、海に言いたもう『黙せ、鎮れ』。すなわち風やみて、大なる風となりぬ』(マルコ4・39)

〔41〕幼児の手を執りて『タリタ、クミ』と言いたもう。少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意なり。42 直ちに少女たちて歩む……』(マルコ5・41〜42)

【ヨハネ】

〔7〕……私に水をおくれよ。……14 だけれども、私がお前にやろうとしている水を飲んだら、お前はもうこんな水を飲まなくなつて、渴かないぞ』(ヨハネ4・7……14 私訳)

〔16〕……助け主を汝らに与う』(ヨハネ14・16)

〔24〕……我等はその証の真なるを知る。25 イエスの行い給いし事は、この外なお多し。もし一つ一つ録さば、我おもうに世界もその録すところの書を載するに耐えざらん。』(ヨハネ21・24〜25)

【使徒行伝】

〔8〕然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』(行伝1・8)

〔1〕五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2 烈しき風の吹ききたるごとき響、にわかにか天より起りて、その坐する所の家に満ち、3 また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。4 彼らみな聖霊にて満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ』(行伝2・1〜4)

〔6〕……わがうちに在るものを汝に与う。イエス・キリストの名によりて歩め』(行伝3・6)

〔18〕……我が目より鱗の如きもの落ちたり』(行伝9・18)

【ロマ】

〔24〕ああ、われ悩める人なるかな、この体……』(ロマ7・24)

〔1〕この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2 キ



リスト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法のりは、なんじを罪と死との法より解放ときはなしたればなり」（ロマ8・1〜2）

「³肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。……⁶肉の念おもいは死なり、霊の念は生命いのちなり、平安なり。……⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居るなり、キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。¹⁰若しキリスト汝らの中に在いまさば体からだは罪によりて死にたる者なれども霊は義にありて生命にあらん」（ロマ8・3〜10）

【コリント前】

「⁴わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力ちからとの証明によりたり。……¹⁴性来うまれつきのままなる人は神の御霊のこゝを受うけず、彼には愚かなる者と見ゆればなり。また之を悟ること能わず、御霊のこゝは霊によりて弁わきまうべき者なるが故なり。¹⁵されど霊に属する者は、すべての事をわきまう、而して己は人に弁えらるる事なし」（コリント前2・4〜15）

「²⁰……律法の下にある者には……律法の下にある者の如くなれり。……²²弱き者には弱き者になれり、これ弱き者を得んためなり」（コリント前9・20〜22）

【ガラテヤ】

「²²然れど御霊の果は愛・喜悅よろこび・平安、寛容・仁慈なごみ・善良、忠信・柔和・節制なり……」（ガラテヤ5・22〜23）

【ピリピ】

「¹²我は……一切の秘訣を得たり」（ピリピ4・12）

●私の伝道は失敗

私の「伝道五十年」とかいうものを顧みれば、いろいろな事がありました。けれども、私の伝道なんてものは、これは失敗ですよ。私の側では失敗。しかしながら、神さまの、キリストの側では、その失敗にもかかわらず、これはただでは済まない。そういう恵みのわざでありました。この召団の皆さん一人びとりにそれぞれのつぴきならない使命がある。「その人でなければ」という使命がある。そのことを今日は、はつきり受けとっていただきたい。私自身が、今までが序の口で、これからが本番というわけです。

今日は、特別なペンテコステです。キリストが復活してから丁度、五十日目。ユダヤでいうと、「初穂の祭」です。不思議なことに、私も、五十年目のペンテコステです。だから、私にとっても特別なものであります。

昨日は「神霊」、今日は「聖霊」。「ト・ pneuma・ハギオン」といいますが、この「 pneuma



というギリシヤ語も同じく「風」という意味も持っています。ヘブライ語と同じです。「息」、「氣息」。「聖霊」というのはキリストの霊なんです。キリストに具現され、発現したところの、驚くべき霊。キリストを抜きにして、「聖霊」なんて言えない。キリストの霊、これが聖霊です。

● 霊の霊止

聖書に少しあたっていきます。一番先に出てくるのはマタイ伝1章18節。

「18 イエス・キリストの誕生は左のごとし。その母マリヤ……聖霊によりてみごもり、

「聖霊によりてみごもり」という言葉が出てくる。マリヤという特別な女性に聖霊が力を与えて、そして不思議な子供が生まれてきた。正にその意味で、

20……その胎に宿る者は聖霊によるなり。

と、主の使いが夢に顯れて言う。そして、

21……汝その名をイエスと名づくべし」(マタイ1・18、21)

旧約でいうと「ヨシユア」「神は救いなり」というのが、「イエス」という名前の意味です。

「11 我は汝らの悔改くいあらためのために、水にてバプテスマを施す。されど我より後に

きたる者は、我よりも力あり、……彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを

施さん。」(マタイ3・11)

「聖霊と火」。聖霊即ち火。火の聖霊。霊火です。モーセに現れた霊火のようなものです。

「あなたは、私から水のバプテスマなんか受ける人ではない」

「いや、私はやるんだ」

と。我々の神への回帰、悔改の徴を、キリストはなされた。水の中に入った。

「16 イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、

神の御霊の、鴿のごとく降りて己が上にきたるを見給う。17 また天より声あり、

曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』(マタイ3・16、17)

水のバプテスマを受けながら、同時に霊のバプテスマを、キリストは受けられた。「水と霊によらずば」という言葉がでてきますが、「水と霊」というのは「悔改と聖霊」のことを言っているわけです。

新約聖書は本当にいたるところ聖霊の書です。ただ、聖霊という言葉が出てこないところが一つある。私は読んでいて驚いた。黙示録なんです。黙示録には聖霊という言葉がでてこない。もしあつたら、教えてください。

無教会時代には、私は、聖霊のことはほとんど聞かないし、使徒行伝は余り興味がない。

藤井先生は、

「使徒行伝は興味がない」

と言った。「行為の世界だ」と思ったんですね、先生は。藤井武先生といえども、使徒行伝



が読めていなかった。

もう、しょうがないですよ。私はぶつ倒されて全身が痺れた。九州の手島君も無教会の流れにいた。彼の雑誌も始めは無教会の人たちと一緒に書いていた。ところが、彼もどんだんに神さまにたたきつけられて、おかまど山という所に隠れて、本当に彼は祈り込んだ。そして聖霊を受けた。しかし、私の書いたものに何か普通のものと違うものがあることを彼は見ていた。それで、

「是非、来てください」

と。正直、私は28歳の時に最初に『祈りの哲学』という感想みたいな、論文みたいなものを書いた。それは発表してはいけないけれども。その終りのところに聖霊のことを書いてるので、自分でも驚いた。もう方向は初めから決まっていた。それがくすぶっていた。それが無教会では満たされなかった。何か欠けていた。それで阿蘇で天界から火が付いた。

このように、イエスは、もう出はじめから、もの凄く霊の霊止で、そして、ヨルダンでもって、特にひとつのカイロスが来て、御霊が降って、

「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」

と。神さまが悦ばれたのは本当に神と一つになって——ヨセフがいるけれども、ヨセフのことはほとんど、そう言つては悪いけれども、もう眼中にない——

「父は天の神さまだ」

と。イスラエルの歴史を導いて来たところの、預言者を通して預言して来たところの父です。

●全的は無的

それで、はつきりと自覚の第一歩がたつたわけです。それでサタンとの一騎打ちをやつて、四十日四十夜断食して、サタンに打ち勝った。これもみな神の聖力によって勝った。キリスト自身は、そのお話の中では、あまり聖霊のことは言われない。ご自分がもう聖霊の化身ですから、言う必要がない。そこから発する言葉が、業が、全部この御霊の業ですから、み霊のことを何も言う必要はないんです。だから、

「私に対してはともかくも、聖霊に逆らったら、その罪だけは赦されない」

と、はつきりとしたことを言われた。恐ろしいですよ。非常に権威がありますから、

「我に従え」

と言うと、ペテロもヨハネもヤコブも文句なしに従った。彼らのこの「従い」は、キリストにもう庄倒されている。見抜かれている。みんなまだ駄目なんです。駄目なだけども、何だか知らないけれども、従わざるを得ない。「はいっ」と言わざるを得ない。

大事なことは、「全的」ということです。100%。言葉も業も全的な質を持たなければ、本ものでない。考えられたものはダメ、分析されたものはダメ。キリストが悦ばれたのは、この全的な人たちです。



ザアカイは、

「キリストとはどんな人だろう?」

というんで、桑の木によじ登った。これが全的な姿なんです。もうキリストは、それを見た。「お前の所へ行くよ」

と。悪いことをしても、全的に平伏すと、それをキリストは救ってしまう。

パウロは全的に逆らっていた。これをひっくり返してしまった。今度は全的に従う人になってしまった。とにかく、人の在り方は全的ということが大事だ。「全的」ということは、

「幼児の(おきな)ごとく」

ということなんです。幼児は本当に全的だ。

私の孫の女の子がいる。これを私はよく自転車で保育園の送り迎えしてやった。まあ一生懸命でお庭で遊んでいるんだね。その名前を呼ぶと、どんなに遊んでいても、パツとすぐそこで止めて跳んで来る。これが全的なんです…(異言)…。

私たちが、「キリストを信ずる」というならば、全的でなかったら、どんなにやってもそれはダメなんです。私たちは、今日、その全的な人間にならなければ。何がどうでもいいよ、キリストと全的に、一つになれば。これはさんざんキリストがヨハネ伝の17章の祈りで、

「彼らと一つとならんがためなり」

と言っておられる。観念信仰がいかにダメかということはそれでも分かる。「全的」ということと「無的」は同じことなんです。これがいつも書いてある、

「0=∞」(ゼロ=無限大)

ということ。「∞」(無限大)が全的で、「0」(ゼロ)が無的ということ。十字架(0)であり、聖霊(∞)であるんです。もう、この境地に入ったら、みんなつかめる。

●キリストの勝利は戴いている

後で一人素晴らしいのを紹介しますけれども、佛道の坊さんの話を。超一流の坊さんたち、最澄、空海、法然、日蓮、親鸞、道元、ああいう連中はみんな全的な魂です。どんな説き方をしてもいいんだよ、キリストの光で全部掴める。この「全的」は、別な言葉でいうと、「無限無量」となる。キリストは無限無量な人だから。神さまを全的に、無限無量に現した人。聖書は書ききれないで困っている。そのことはヨハネ伝の終りの方に出ている。

「²⁴……我等はその証の真なるを知る。²⁵イエスの行い給いし事は、この外な

お多し。もし一つ一つ録さば、我おもうに世界もその録すところの書を載するに耐えざらん。」(ヨハネ21・24〜25)

と書いてある。無限無量だと。そうして、地上に現れたキリストどころじゃない。世の終りまで、最後の新天地が来るまで、キリストは無限無量に、いろいろな人を通して、全的な存在を通して、現していかれる。大変なんです。ナポレオンがセント・ヘレナでもって、



最後にキリストに参ったでしょ、

「福音は生き物だった」

と。いやはやもう、これは大変な方でね、もう何とも説明できないですよ。

この召団の在り方がどう変わるうが、どういうような具合になるうが一つも心配しない。これさえ掴んで、つかまえさせられて、あなた方が動いていくならば。何人であろうといい。何召団であろうといい。そして、畏るべきことが起きる。

キリストの勝利は、私たちに必ずいただくものです。戴いているんです。

「汝すでに世に勝てり」

という。いくら騙かされても、勝っているぞ、心配するな。そんなマイナスに比べることのできない本当の凄いプラスがやってくるぞと。だから、聖霊の世界は、どんなことに遭っても絶対にへこたれない。逆にもの凄く力強くなる。

「²⁰これ言うものは汝等にあらず、其の中にありて言いたもう汝らの父の霊なり。」(マタイ10・20)

り。」(マタイ10・20)

「汝らの父の霊なり」とは、

「我を通して与えられるところの聖霊なり」

と同じこと。

「その時、その時にどう言おうか、こう言おうかなんて、心配要らんぞ」

と。私はしゃべっているうちに、いよいよ上から、霊界から力が来て、終りになればなる程いよいよ元気になってしまう。疲れるどころの騒ぎじゃない。普通の牧師さんは疲れるんだよ。私は牧師じゃないんだ、「み霊になくてしゃべれるか」と。

「²²又なんじら我が名のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐え忍ぶも

のは救わるべし」(マタイ10・22)

なんて思っつてはダメですよ。終りまで耐え忍ばざるを得ない。その力は上から来るから。全部、上からです。

●一遍上人

一遍上人(1239～1289)、これは大変な人です。法然、親鸞をもう一つ上まわったような人。ヨーロッパの神学者がこれを読んだら、びっくりするだろうね。伊予の、愛媛県の出身です。10歳の時にお母さんと死に別れた。

法然も親鸞も道元もみんな幼にしてお母さんを亡くなしている。お釈迦さんはお母さんを知らない。母親というものは幼児にとっては絶対の存在です。お釈迦さんはそれすら知らない。だから結局ああいうような道をたどらせられたんだね、不思議なことです。

お父さんの、如仏の命でもって出家して、九州の太宰府で法然の高弟の聖空しょうくうという者の門下になった。今度は、そのうちにお父さんも亡くなってしまった。1217年に信濃の



善光寺に詣でて参籠した。それから帰省して、岩窟に籠もった。それから今度は、熊野の証誠殿しょうじょうでんに参籠し、夢告を受ける。そして、他力本願の神髓に到達する。

「阿弥陀仏の十劫正覚じゅうくわうしょうかくに一切衆生は南無阿弥陀仏と決定けつじょうしている」

と。「阿弥陀仏の十劫正覚」とは素晴らしい言葉だね。永遠的な正覚ですね、悟りの世界。それでもって一切衆生は南無阿弥陀仏と結定けつじょうされている。

「こちら側の信不信を選ばず、浄不浄を嫌わず。それ故、人の往生は念仏を信じ或は称えることによって決するものではない。信すること、称えること自体が実は自力介在の余地となる。衆生の往生は既に十劫の昔、弥陀が正覚を得たその瞬間に、南無阿弥陀仏と決定しているのである。往生の主体みょうじゅうは名号それ自身であって、人ではない。」

「南無阿弥陀仏」という名号——これ六字ですね——これが絶対恩寵としてかかっているので、こちらの信仰の仕方がどうだこうだと、そんなことではないと。だから、これは凄い言葉です。まだ法然や親鸞とかは、南無阿弥陀仏そのものに、非常に問題がかかっていましたけれども、それを突き抜けてしまった。

「人が往生するのなら、信も浄も——信仰も浄きよきことも——必要となるけれども、主体は名号であって、そこには信不信、浄不浄という人智人力の介在の余地なし。これが、一遍の体受されたところの他力本願の妙境であった。」

絶対境です。圧倒的本願境です。パウロがキリストにひっくり返されて、キリストの僕にさせられてしまって、言いなりに動きだした。これは全くそうですね。

● 圧倒されて生きている

電灯の光は太陽の光とは桁が違う。自分で信仰しているようなのは電灯の光みたいなものだ。太陽の光が来て、私たちを照らしている。大気が私たちを活かしている。これは全部、絶対他力でしょうが。地球は、絶対他力の太陽でもって動かされ、生きとし生けるものは全部そのお陰で生きている。

「太陽は素晴らしいなあ」

と、そのことに本当に気が付いたのは、大詩人ゲーテです。

「私は無条件に太陽には拝はい跪きする」

とゲーテは言っている。さすがは、ゲーテは全的な人間だから。

昨日、スピノザのことで言ったでしょ、「脱我」ということを。

「もう、圧倒されて生きている」

ということだけです、何だか知らんけれども。或は、浸透されて生きている。空気、気が。これも気だ。やっぱり霊だから。気、霊、風。だから、魂はキリストの聖霊で、身体はこの大気で、天地正大の気でもって浸透されている、そういう存在である。

人類は何とバカげたことをやっているか。政治家が何だ。政治なんかやらないくらいだ



と。日本の救は、光は、この一点にかかっている。冗談じゃないです。もう、教会がどうだ、無教会がどうだ、なんてどうでもいいですよ、そんなことは。

「9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居るなり、キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。」(ロマ8:9)

と、パウロがはつきりローマ書の8章でいつている。ロマ書8章は大変なところだ。聖霊の章だから、あそこは。

「24 ああ、われ悩める人なるかな、この体……」(ロマ7:24)

と言つて、7章で地獄の告白をしているのが、8章に来たら天国の告白となつている。7章と8章は地獄と天国だ。イザヤ書の34章と35章みたいなものです。イザヤ書の35章は福音書の預言です。あのイザヤ書35章をそのまま、み霊の力でもって展開していつて、地上に天国を現じていたのがキリストなんだから。福音書というのは、天国の、聖霊の光の、力の、愛の現象している世界です。福音書だけを破つてポケットに入れて、もう楽しくてしようがないという人にならなければ。少し、皆さん、気違いにならなければダメですよ。

「神のためには狂えるなり」

とパウロが言つた。

「エホバの言に我は酔えるなり」

とエレミヤが言つた。あなた方一人びとりは、ギデオンの精鋭三百の如く。灯火は聖霊の光。カンテラの壺をぶち割つて光を現して、ラツパを吹き鳴らして行つた。大軍が来たと思つて、向こうは驚いて、ミデアンの軍はやつつけられた。神を讃える讚美歌を歌いながら、聖霊の光をもつて、語りまた言い、為しながら、というような人生だよな。

「何でも来やがれ、どうにでもなりやがれ」

と。いよいよ、み霊は働いてくださる。ちよつともガンバル必要はない。上からの力が、私たち一人びとりを通して展開していく。そういう魂、もう説明できないような、そういう人に、お一人お一人が必ずなつていく。それでなければ、

「空の空なるかな、すべて空なり。こんな信仰なんか止めちゃえ」

ということになる。

「千万人と雖も吾往かん」

という、孔子以上のことになるんです。私みたいな本来臆病の弱虫の泣き虫が、どうしてこんなことになってしまったか、と不思議でしょうがない。有難いね、このみ霊は。それは、あなた方、後でコリント前書12章を読めば分かりますけれども。

●六字名号一遍法

この一遍上人は、そのようにして、

「南無阿弥陀仏」



という、ただ六字、これがもの凄い力でもって自分に向かってきた。

「六字の名号一遍法」

というんだ。「法」は「ダルマ」或は「ダンマ」とも言いますけれども。それで、遍歴を始めた。「遊行」。だから「遊行上人」という。

「寺なく、草庵なく、無衣」

衣も無い。衣が無いから、彼は、死人がいると、「済みませんが」と言つて、路傍に死んだ人の衣をいただいで着たという。棄て衣を。徹底して托鉢で動いている。そして、彼は語録の中でこう言っています。

「よろづ生といけるもの、山河草木、ふく風、たつ浪の音までも、念仏ならずといふことなし」

全部、これは念仏だと。自然界における——パウロがロマ書8章18節から22節のところ、自然界の呻きを聞いたというが——「呻き」でなくて、これは「念仏」だという。だから、自然は本当に自分の延長です。一つになっている。

「一遍は総ての生物、森羅万象を六字の名号に包摂してしまった。即ち、名号六字のみを残して、一切を棄てたと同時に、一切を六字に即如せしめたのである。」

これは私の文章ですけれども。

「又云、南無とは十方衆生の機、阿弥陀とは法なり、仏とは能覚のうかくの人なり。六字をしばらく機・法・覚の三字に開して、終に三重が一体となるなり。名号の外のうきに能歸のうきの衆生もなく、所歸しよきの法もなく、能覚の人もなきなり」

この三宝を言つても結局そうだと。全部これは名号の中に入ってしまう。

「かくて、一遍は六字の中に弥陀と人との不二の境地、二者一如の相ありと体感したわけである」

「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」

というお算ふだを書いて歩いてきた。

「この南無阿弥陀仏で誰でも救われる。もう救われているんだ、何を言っているか。信じるの信じないと、そんなことではないんだ」

と。そのようにこの他力本願の六字に圧倒されて、徹底しているんだね、これ。だから何も、「南無阿弥陀仏」なんか言う必要もないんだ。お算をそうやって賦さづけて歩いていたらしい。

「この絶我、無我の叫びで、直ちに聖霊充滿の現実となる。やはり、この福音は宗教の極致であると言わざるを得ない。一遍の極致は次の言葉にあると思われる。

『名号に心をいれることも、こころに名号をいれるべからず』

名号の中に心を投げ入れるのは、それはいいが、心の中に名号を入れてはいかん。そうすると、主客転倒になると。こういうことです。

『念々の称名は、念仏が念仏を申すなり』



そこで、「捨聖^{すてひじり}」といわれる。何でも捨ててしまう。自分で、南無阿弥陀仏と、こっちは称えることも捨ててしまう。本当は彼は、「聖^{ひじり}」なんて言われたくないんだ。

●キリストの中に捨てる

我々が捨てる場所は、もちろんキリストです。キリストの中に捨てる。何も整える必要はない。あるがまま。いや、実に捨てられている、十字架で。十字架上に捨てられている自分に気が付くだけのなし。

「ああ、捨てられていました。私が捨てるんじゃないやありませんでした」と。

「我が神、我が神、何ぞ我を棄て給いし」

という、あの驚くべき御言。凄いな。だから、「棄身」という言葉と「キリストに、主に帰る」という言葉は、みんな

「主に帰される」

ということ。

「来てください」

と、エレミヤの祈りの中にある。

「私はあなたの所に行けませんから、あなたの方から来てください」

と。それは本当の祈りなんだ。

「ぶっ倒れてしまっ行って行けませんから」

「ああ、行つてやるよ」

と。ぶっ倒れたと思つたら、それはキリストの腕の中だった、というわけだ。もう、そのような境地に徹底してくださいよ、存在的に。

「どうも私は全的になれません」

と、そんなことを考えることは必要ない。全的になろうと思つて、一生懸命でがんばつたら、みんなくたびれるよ。

「倒れてみたら全的だった。倒れてみたらキリストの中だった」

と。全部、これが、一遍上人と同じ恩寵の事態。

「倒れてみたら空気の中だった、どこへ行つても空気の中だ。寝ていても空気を吸っていました」

と。大気と我々の肉体的存在との切つても切れない関係は、霊の世界でそのようなことになった。また、なっているんだ、上から来ているんだから。一人びとりをそのようなにして愛したもうというのほさういことだ。誰に棄てられても、キリストはあなた方一人びとりを、我々一人びとりを絶対に棄てない。この境地を伝えざるを得ないということですよ。

「一遍は生涯を捨聖^{すてひじり}として、実は僧たることも棄てて、捨聖^{すてひじり}は聖^{ひじり}も捨てたという意味

内容にした方が本当である。念仏権化の開国行脚 遊行に過ぎて……」



そうすると、今度は、凄いことが起きる。ある時は、空に紫雲がたなびいた。華びらが、どこからか知らないが、散つてきた。「奇瑞」が起る。ダンテの神曲みたいだな。一遍の身辺に不思議な事が非常に起こった。それでもう、自然に踊ってしまった。そういうことになる、アッシジのフランシス、ザビエル、ああいうご連中と似たような、あるいは、むしろ一遍の方が上かも知れない。とにかく、この一遍上人というのは大変な坊主です。寺も何も無い。至る所、これお寺である。至る所、これ天国、どこであろうと。

「四条、五条の橋の上、行く人……御山にして」

とか何とかいう歌があつたね、四条、五条の人がたくさんいる所、これもそこで坐禅を組んでいると、深山幽谷だという。

「どこでもこれは幕屋でござい」

と、所を選ばず。自分が天国体になつていからね。自分自身が幕屋だから。そういうようなことで、相對界にありながら、しょっちゅう絶対界をそこに展開しているような人。だから、行き詰まらない。

●十字架と聖霊

「³¹この故に汝らに告ぐ、人の凡ての罪と瀆けがしとは赦されん、されど御霊を瀆す

ことは赦されじ。³²誰にても言ことばをもて人の子に逆う者は赦されん、然れど言をもて聖霊に逆らう者は、この世にても後の世にても赦されじ」(マタイ12・

31~32)

恐ろしいことが書いてある。もう、キリストの決定的な言葉です。パウロが一生懸命で、キリストに逆らつていた。

「パウロは、もうしようがない、ひっくり返してやろう」

と、復活のキリストがパウロをひっくり返してまつた。ご承知のとおり。使徒行伝の9章、22章、26章。ところが、今度は、パウロは聖霊行の人となつた。

「¹⁸……我が目より鱗うろこの如きもの落ちたり」(行伝9・18)

と。曠野で祈つたら、十字架が現れた。パウロにとっては、聖霊が先だつたけれども、十字架と聖霊は離すことのできないものだ。

「十字架の他、何をも語るまじと思ふ」

なんていう言葉もあるくらいです。パウロの書翰を見てもう大変だよな。ちつとも難しくくない、御霊の光で読んでいれば。

「神学者が何をゴタゴタやっているか」

と。だから、私は組織神学会から出てしまった。

「神さまの真理が、人間が組み立てるような組織になるか、冗談じゃないぞ」

と。だから、私は誰も味方がいないですよ。ところが、使徒たち、預言者たちが天界で



もって応援してくれる。

「こんな教育があるか、こんな政治があるか」

というわけで、私の詩では烈々と書くから。大変な詩だよ、本当に。だけれども、私たちは聖霊に逆らうなんてことは、あり得ません。十字架にすっかり平伏ひれふしている人間ですから。十字架に平伏さなかったら、大変なことになる。心配なくなってしまうんです、正直。

「35/53」(53分の35)

これを忘れないでください。イザヤ書53章は十字架で、35章は聖霊の世界だから。十字架と聖霊は、私はこういう徴(円の中に十)で書いた。この聖霊の世界は円現する。

「この世の後でも赦されなさい」

というんだからね、徹底しているんだ。それはもうサタンだよ。聖霊に逆らう者はサタン。聖霊の真似して、聖霊であるかの如きやつは、霊的傲慢は一番悪い。白きサタンが一番悪い。

「54己が郷にいたり、会堂にて教え給えば、人々おどろきて言う『この人はこの智慧と此等の能力ちからとを何処いずこより得しぞ。55これ木匠たくみの子にあらずや、其の母はマリヤ、其の兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや。56又そ

の姉妹も皆われらと共に非ずや。然るに此等のすべての事は何処より得しぞ。』57遂に人々かれに躓つまずけり。イエス彼らに言いたもう『預言者はおのが郷、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』(マタイ13・54〜57)

キリストは山に籠もって祈って、神さまから直接きているから、人々は躓いた。おのが郷、おのが家だけはダメだと。キリストもガリラヤに行かれてしまった。

「しようがないな。そのうちに目が醒める時が来るぞ」

と。霊の世界は非連続の連続ですから。血統でも何でもない。

「聖意を行う者、これわが母なり、わが兄弟なり、これわが姉妹なり」

という。「富士山はいいなあ」ではないんだ。富士山と一つにならなければ。「花はきれいだなあ」ではない。花と一つにならなくては。何でも、一つになっている世界が本ものの世界です。まだ対象化しているうちはダメ。

「我は花なり、我は木なり」

と。だから、一遍が言ったでしょ。

「この自然界のものはみんな念仏だ」

という。「私と同じ心だ」と。

「念仏している。有難いなあ。こっちが念仏しなくても、もう念仏そのものにされてしまっている。念仏的存在にされてしまって、口で称えなくてもいい」

なんてなことになる。



●祈りは「主さまー」一つ

皆さん、もう、恐れるものは一つもないですよ。私は「主さま、あなたは」という歌を、35回の夏の特別集会の時に歌ったでしょ。あれです。もう祈りは、

「主さまー」

の一つだもの。「南無阿弥陀仏」よりか、「南無妙法蓮華経」よりかもっと簡単だ。一番簡単だ、「主さまー」と。「主さま」的存在、「我なんじを棄てず」的存在、「我なんじを悦ぶ」的存在。それで全生涯を通して、あなた方も、言葉の一番深い意味において、讚美ならざるを得ない。聖名を讚えざるを得ない。「聖名に在りて」なんです。「によって」「じゃない。聖名に在って。中に入っているんです。

マタイ伝の一番後には、これは学問的には、キリストの言葉とはしないんですけれども、しかし、それはキリストの本願ではある。私はそのまま受けとる。

「18イエス進みきたり、彼らに語りて言いたもう『我は天にても地にても一切の権を与えられたり。然れば汝ら往きて、もろもろの国人を弟子となし、父と子と聖霊との名によりてバプテスマを施し、²⁰わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教えよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり』」(マタイ28・18〜20)

「名によりて」は「名にありて」だよ。キリストの御言をここにまとめたんでしよう。この通りおっしゃったかは、別問題だけれども。学者というのはすぐ、

「これはキリストの言葉か、後からの教会の言葉か？」

とばかり詮索して、その真義を本当に受けとらない。所謂学問的研究なんてものは第二義的なこと。第一義はその言葉の奥の、神さまの根源語をつかまえてしまうことです。

「³⁹イエス起きて風をいましめ、海に言いたもう『黙せ、鎮れ』。すなわち風

やみて、大なる風となりぬ」(マルコ4・39)

嵐の中で、「黙せ、鎮れ」と言えば、自然界の嵐も鎮まってしまう。大変な霊止です。これはみんな、聖霊の声だから。なにも「聖霊」なんてことを言わなくても、分かりきっている。とにかく、こういう所を読む時に、その境地に、このドラマの中に自分を本当に入れて、そしてキリストのこの力に圧倒されながら読んでくださいよ。それでなければ、聖書を読んだことにならない。

「はあ、キリストはそんな不思議なことをしたんですかあ」

と、そんなことではないんだ。もう、読むことが直ちに力となり、読むことが直ちに祈りとなる。読んでから祈るのではない。即読、即禱なんだ。もう本当に、簡単になつてくださいますよ。二段構えでなくて。すべて「即如」の世界。「即ちその如し」で、「一如」です。

電車の中でもどこでも、読んでいれば力が来てしまうがよい。

「汝を休ません」



とキリストが言われたが、「休ません」ではない。

「汝に力を与える」

ということ。力を与えられて、休んだ以上になる。私は馬鹿かね、これ。本当に馬鹿なんだ。そういうように直ちに受けとるから。ひとは

「この意味はどうだ」

と、すぐ考える。

● 存在的伝道が一番大事

彼岸を此岸しがんとし、此岸を彼岸としてしまう世界です。

「天国は汝らのうちに在り」

というのはそのことなんです。

「まわりがどんな地獄であろうと煉獄であろうと、いいよ。私は天国であり、天国を開示している」

と。それが、キリストがなさった世界だからね。キリストの本願の力だから、それがあなた方の身边にいくわけです。

「何か知らないが、彼のそばにいと、うれしいな、暖かいな、力が来るな、安心だな」

なんてなことになる。それが本当の存在的伝道です。存在的伝道が一番大事です。いくら冗談言ったって、馬鹿言ったっていいよ。しかし、その奥にはキリストの世界がある。そうすると、

「やっぱりあれが本当の本質だなあ」

ということになる。しょっちゅうお祈りのことをしゃべったり、聖書のことをしゃべったり、そんな必要はない、何も。聞いている方で嫌になっちゃう、いわゆるお説教めいたことは。

「20……律法の下にある者には……律法の下にある者の如くなれり。……22弱

き者には弱き者になれり、これ弱き者を得んためなり」(コリント前9・20…

22)

パウロは自在になった。

「12我は……一切の秘訣を得たり」(ピリピ4・12)

と。そうして、相手を救い上げていくんです。

サマリヤの女とのキリストもそうでしょ。

「7……私に水をおくれよ。……14だけれども、私がお前にやろうとしている

水を飲んだら、お前はもうこんな水を飲まなくなつて、渴かないぞ」(ヨハネ

4・7…14 私訳)

と言うものだから、

「どこから汲んできたか？」



なんて面白いね、あの会話は。それで素性を言い当てたら、びっくりしちゃって、

「ああ、あなたは預言者だ」

と。預言者どころのさわぎじゃない。それで、

「みんな、来てみる。来たりて見よ」

と、水を汲むことも忘れてしまっただけ。あのサマリヤの女の所は面白いね。それは、その次元に自分をおいて、相手を凄い次元に入れてしまうわけです。相手の中に自分を入れて、それを変質変貌させていく。それが本当の伝道の姿です。

「信じなさい。信じなければダメです」

なんて、そんな言い方したって、ダメなんだ。

「41 幼児の手を執りて『タリタ、クミ』と言いたもう。少女よ、我なんじに言う、

起きよ、との意なり。42 直ちに少女たちて歩む……」(マルコ5・41、42)

死人が甦ってしまったね。大変な人だ。ナインの若者の葬式の時もそうだ。お母さんが柩のわきを泣きながら歩いていたら、「ちよつと止めろ」と。

「若者よ、我、なんじに告ぐ、起きよ！」

と言ったら、若者が棺桶から起き上がってしまった。そんな事ができる人が世界にいますか。もう降参です、キリストには。降参して、その生命の世界に入ってみなさい。

「こんなありがたいことがどこにあるか」

というんだ。これは全部、本願の効力だから。一遍なんかも、キリストに遭ったら、びっくりしちゃうよ、

「俺はもう、名号みょうごうも止めた。キリストさままだ」

と。神学校を出てどうのこうのじゃないよ。本当に無学の凡人ただびとのペテロの如きが、

「6……わがうちに在るものを汝に与う。イエス・キリストの名によりて歩め」

(行伝3・6)

と言ったら、生まれつきの跛者が立ってしまった。使徒行伝のペテロを見てくださいます、使徒行伝の7章くらいまでのペテロを。そして8章以下のパウロを。

●聖霊の人にもうなっている

ヨハネ伝の14章から17章までは大変なところだ。

「16……助け主を汝らに与う」(ヨハネ14・16)

と、キリストは約束しておられる。「助け主」「慰め主」とは聖霊のこと。

「8 然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力ちからをうけん、而してエルサレム、

ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極はてにまで我が証人とならん」(行伝1・8)

我々もそのような、聖霊の人に、もう既に君たちはなっている、夏の集会やなんかで。今日は、もちろん、もう一つ次元の違った世界に入らざるを得ない。



「私にそんなことができるか？」

と。「私」にはできませんよ、「私」じゃない。キリストがさせてくださる。もう平伏して、

「主さまー。」

と。心の中で本当に「主さま！」と祈って、一つになって、そして、困っている人に手を按いてごらん。力が必ず働くから、必ず。その境地に入らなければダメですよ、手はただ按いたって。まずキリストと一つになって、本当の祈りはそこから始まる。

私は「何時には祈ります」と遠隔の祈祷をする時には、祈られる相手の人に按手する、そういう形で自分の部屋の中でもその現実を祈っている。死人を甦らせたキリストの力です。

我々自身が、パウロが言っているように、キリストの文ふみとなる。活ける文となる。正に「活字」なんだ、活きた文字。これは、毎日キリストに祈り入ることが非常に大事なことです。私は夜だ。もう相対的なものはみんなふっ飛んじやうな、その世界に入ると。何がどうなってもいい。相対的な祈りの内容がなくなってしまう。

「あなたがいいようにしてください。どうなってもいいです。いわゆる失敗に見え

ようが、反対に見えようが、何でもいいです、その世界に入ったら」

と。十字架上のキリストの御意を、本当に知ることはなかなかできませんけれども、キリストの十字架がいかに凄いものであるかは。

「46……わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」(マタイ27・46)

と。そしてあの大声を叫んだら、至聖所の幕が切って落とされてしまった。現象を言っているのではないですよ。本当の現実には、そういう現象の奥の世界にありますから。

まあ、矛盾と混沌だらけです、世界というものは。これはもう、キリストと一緒に十字架を負わなかったら、天国には行けない。

「証人となれ」

とは、

「キリストがこういうことをしました」

と言うことが、「証人」じゃない。同質のものをキリストのみ力で現していくことが「証人」ということ。「あかしびと」というのは、存在で現していかなかったら、証人じゃないですよ。

「キリストは復活した」

ということ、弟子どもが伝えたと、それは証人じゃない。

「その生命に私は与かっています」

という時に、はじめて証人なんだ。

「聖霊を与える」

と仰った。その聖霊が来たね、現象で、もの凄いのが。だけれども、この受けとった三千人のうち、いったい何人が本当に受けとりぬいたかは、これは別問題です。



●常燃の火に燃やす

明治6年に築地で或るリバイバルの凄い集会があった。道ゆく人が吸い込まれるような凄い集会だったらしい。内村鑑三もそこにおいて、聖霊のバプテスマに与かった。ところが、

「どうもあれは、ちよつと現象がおかしい」

と、現象に躓いた。もちろん、内村先生は聖霊のことを非常に重んじて書いていらつしやる所もありますよ。けれども、惜しいね。内村先生に火花が散っていたものを、本当の常燃の火に燃やすのが我々のバトンタッチの意味なんだから。

「五旬節の日となり、彼らみな一処ひとところに集い居りしに、²烈しき風の吹ききたるごとき響ひびき、にわかひらかに天より起りて、その坐する所の家に満ち、³また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。⁴彼らみな聖霊にて満たされ、御霊の宣のたまべしむるままに異邦ことくにの言にて語りはじむ」(行伝2:1-4)

地方から来ている者に、自分たちはこんな言葉を知らないのに、語らしめられている。もの凄い高次な異言で語っているわけです。大変なもんだ。いつかもしましたように、サウダーシングが英語を知らないんだけど、聞いていた人はみな英語の人。それで彼は祈っていたら、英語でしゃべれる。それと同じことですから。「これはギリシヤ語だろう」と、そうじゃないですよ。ここに書いてある通り。だから、この2章の御霊のバプテスマの現象はもの凄いです。

その聖霊を受けて、それが本当に常燃の火となるための土台が十字架である。決して、その聖霊がサタンの霊に切り変わることがない。十字架ぬきにしたら、あぶないです。そういうことをはつきり言う人がいないんだね、キリスト教界で。おかしなもんだね、これ。

コリント前書13章が愛の讃歌とするならば、ロマ書8章は聖霊の讃歌です。コリント前書15章は復活の讃歌。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。²キリスト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法のりは、なんじを罪と死との法より解放ときはなしたればなり」(ロマ8:1-2)

「キリスト・イエスに在る者」とは、

「キリスト・イエスに捕まつてるところの者」

だ。キリストの生命の聖霊。聖霊は生命であり、愛であり、力であり、智慧であり、聖霊の内容は無限量ですから。もう、自我という罪、その果みであるところの死、そういうつた法則、罪の法則、それから解放して自由にして永遠の生命の世界に入れてしまう。盛さかんなる哉かなという世界です。



● 霊法

この「法」というのは、水は低きに流れ去るといふ。全部、法の世界です。「ダルマ」、或は「ダシマ」とも言いますけれども。本当の「法」の世界は力を持っている。旧約の律法。道德法。自然法。ところが、一番上は「霊法」の世界。「生命の御霊の法」の霊法の世界。

「奇蹟」なんてものはない。奇蹟というのは法の世界が分からないから、奇蹟なんて言っている。この法はもつとも素晴らしい天的必然であり、また本当の自由である。

法の世界をやる人が、実は、福音の世界をはっきりと受けとれる。もう一つ上の、次元の違った法の世界だからね。人間が作った法じゃないんだから。人間が作るけれども、それはもちろん道德法則と大いに関係はしているでしょう。道德法です。

「これを思えば思ふほど、またしばしばこれを念ずるほど、自分の驚嘆するものが二つある。わが上なる星震の空とわが衷なる道德の法」

という、カントの有名な言葉ですね。「わが衷なる道德の法」、誰が何と言おうと、これは先験的に賜った法則の世界です。それは何といったって、カントの『実践理性批判』は素晴らしい本です。ただ「観念」なんて言えません。カントは、それと、自然界、知識の世界の法の世界の「純粹理性」というもの、それから芸術の世界の「判断力批判」というもの——真善美の世界——を展開したんだけれども。

その上の法則の「霊法」の世界、これが本当の自由を与える。この哲学的な道德法の世界で「自由」と言っていたのが、エラスムスです。ルターが「そうじゃないぞ」と。本当の自由は霊法の法の世界だ、霊法が本当の自由を持っていると。

「御霊のあるところに自由あり」

とパウロが言ったのがそれです。これだけが自己に捕らわれない、本当の自由。ルターがそのことを「奴隷意志」と言った。

「自分の意志を奴隷にしなければ、神の意志が本当に働く法則の世界じゃないぞ」

と。ルター自身が、『奴隷意志論』は自分の書いた一番大事な本だと言っている。パウロは、

「我はキリストの奴隷なり」

と言った。囚人であるところ、このパウロが一番自由自在に動いた。これが法の世界、霊法の世界。霊法は、御霊は力を持っている。

「³肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり」(ロマ8:3)

キリストは我々と同じ相対的な世界に入りながら、弱さを持ちながら、しかし、人間的な弱さに完全に打ち勝って、霊法の生命の世界で生命の御霊の法をもって貫かれた。いつも、

「父よ！」

と言って、祈り入っていた。

「わが願いにあらず、汝の御意をなし給え。どうぞお使いください」



と。キリストの父に対する平伏しというものは、凄いもんだね、あまりみんな言わないよ
うだけれども。だから、この肉の弱さも、パウロがここに言っている通り。ところがどつ
こい、それに勝った。それは本当に霊法を、「生命の御霊の法」をもって生きていたから、
力を持っているから。我々の道徳法には力がない。良心の力は弱い。だから、
「己を治めることは城を取るよりも難しい」
と言う。

「己に勝つことはどんな強敵に勝つよりも勇者である」
とは、カントの言葉です。

「厳として道徳法則はあるが、これを本当に全うすることは誰もできない。けれど
も法則はあるんだ」

と。モーセの十戒を誰も本当の意味でもって、本質においてはこれを実行できない。それ
以上のことを、山上の垂訓で、キリストは言われた。いよいよ、キリストは難しいことを
仰る。誰もできない。どのキリストの言葉にも及第することができない、誰も。それで、「何
が福音か」と。だけれども、

「私に來なさい、実力を与えるから」
というのがこの福音なんです。だから、教えじゃない。「キリスト教」じゃない。「キリスト
道」、道である。または、「キリスト力」でもいいんだ。力なんだ。

「福音は、言葉にあらざ、力なり」
と、パウロが言ったのはそのことなんだ。暴力じゃないよ、これは。敵をも救い上げると
ころの力だ。その力の一番内的な性格は愛です。生命は愛の生命です。ただ生きているの
ではない。「愛」とは、相手を救い上げること。助け上げること。そういう実力で無いものは、
本当の神さまからの愛ではない。神さまからの愛はみんなそう。

「アガペーだ、フィロースだ、エロースだ」
と、そんなものを区別しないで、

「愛はすべて神から」
と言ったゲーテはやっぱりでつかいね。恋愛であろうと何であろうと。だから、彼は非常
に明るい。陰性でない。愛はすべて神からのものだ。

「親鳥が、小鳥が攻められている時に、自分の生命を捨ててまでも、それを守ろう
とするじゃないか。神さまは自然界にこのようにして、愛を小さな動物にいたる

まで与えているじゃないか」
と、『エッカーマンとの対話』の中で書いてあります。

●肉と霊

「⁶肉の念は死なり、⁶霊の念は生命なり、平安なり」(ロマ8:6)



「肉」の思い、とは「自我本位」の思いということ。「肉」というのはただ肉情ではない。どんなに偉そうなことでも、どんなに立派そうに見えても、自己本位な事は全部、「肉」です。どんなにつまらない事に見えても、それが神から発し、神本位、キリスト本位、キリストから発しているならば、これが「霊」なんです。「霊的」とはそういうことです。神の、み霊的ということだ。

「肉」というのはエゴイズム。エゴイズムは全部「肉」。今の政界の考え方なんかは全部「肉」だ。「霊」じゃない。大政治家は一人もない。西郷南洲みたいな魂は「霊」だね。

だから、聖霊のあるところに本当の平安がある。京都には平安神宮があるけれども、あなた自身が平安神宮だ。あんな所へ行かなくなつていい。

「⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居るなり、キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。¹⁰若しキリスト

汝らの中に在さば^{いまだ}体は罪によりて死にたる者なれども^{からだ}霊は義にありて^{いのち}生命に

あらん」(ロマ8:9、10)

そういう矛盾構造だが仕方がないと。しかし、体も神さまから賜ったものだからね。飲んだり食べたりすることも、本当にその角度から、聖名に感謝し讚美しているような気持ちならば、それは「霊的」に食べていることになる、同じにいただいても。だから、我々はいただく時に感謝していただいて、「御馳走さま」というのは、そうなんだ。

この頃の子供で、「ごちそうさま」と言わないのがある。「いただきます」「ごちそうさま」と、ちゃんとお辞儀しなければダメだ。学校でさせているかなんか知らなければ。もう少し、ピシャツとした法の世界を——始めは道徳法でいいから——やらなければダメなんですよ、日本は。「民主主義、民主主義」と、そんなことばかり言っている。「民主主義」という言葉が災いになつている、躓きになつている。

その点で、ヒルティの『幸福論』は素晴らしい。あれは、何も「幸福」のためじゃない。あの「幸福」という言葉が躓きになるけれども。若い人が読むべき本です。私が『百世の師ヒルティ』と言つたのは、そのことなんです。非常に健全な世界です。

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」(ロマ8:9)

と、パウロが宣言している。何も恐がることはない。

「はいっ、御霊は宿ってます」

と。「もしも」じゃない。パウロはよく「もし」というけれども。「もし、もし」じゃない。

「あなた方は御霊が宿っているねえ」

と。仮定で言つたら、断定として受けとつていかなければダメですよ、パウロがものごとを仮定で言つたつて。「もし、何々ならば」とは、

「そうであるから」

という、断定的に受けとつていけないと。



「汝はこうであるから」
と。救いというものは、相手を信じて、その現実、一人称、二人称の現在形でもって、ピシャツと言う、その世界です。

「既に、救われたり。故に、来たれ」と。

「来たら、救つてやるよ」

じゃない。さっきの一遍上人じゃないけれども。祈る時も、その病める人の治っている現実を霊視しながら祈る。「治るでしようか」じゃない、「必ず治る」と、いや

「既に癒されてある」
と、根源現実を受けとっていく。

口語訳聖書の「…であろう」なんていう言い方は嫌いなんだ、私は。「…であろう」じゃない。信仰の世界は「…である」の世界。讚美歌でも、何々「…ならん」じゃダメだ。「…たまわん」じゃない、「…たもう」だ。何か私は怒つたようなものの言い方をするけれども仕方がない。

●愛・歓喜・平安

「²²然れど御霊の果は愛・^{よろこび}喜悅・平安、寛容・^{なまけ}仁慈・善良、忠信・柔和・節制なり……」(ガラテヤ5・22〜23)

「平和」じゃない、これは「平安」。「善良」は、或は「善意」でいい。「忠信」は「信仰」という字と同じです。「愛・歓喜・平安」と、一番先きに書いてあるのは、「愛」でしょ。「御霊の果は」とあるけれども、「果」じゃないんだ。

「御霊の本当の持つているところの質は、内容は」ということ。

「御霊があれば、こうなつて来ます」

なんて、二段構えに考えてはダメですよ、この「^み果」という言葉を。パウロの言い方は、ちよつと私はあまり感心しないけれども。

「御霊の内容はこういうものを持つているぞ」

ということ。一番先きに「愛」だと。御霊の一番の本質は愛である。

「御霊の最初の名前は愛である」

というのは、トーマス・アクイナスの言葉だけれども。

「心を尽くし精神を尽くし力を尽くして、主たる汝の神を愛すべし」

ということは、

「神さまはお前たちを全身全霊で愛しておられるから、それだから、愛せるよ」というわけだ。

「愛に圧倒されているから、愛せざるを得ないじゃないか」



と。あのキリストの言葉は、私は永いこと、

「ダメだなあ、これはとてもそんなことできないなあ」

と、無教会時代は思っていた。しかし、神さまは何でもかんでも、キリストを通して、私を救しながら愛してくださっている。だから、愛せざるを得ない。「主さま！」と讃美せざるを得ない。自然なんです、これ。キリストは、旧約の言葉で引用してそんなことを仰ったけれども、キリストの本当の意は、

「愛せざるを得ないねえ」

ということなんです、もう一つ奥をつかまえば。そうでなければ、本当の世界じゃないですから、「仕方がない」とやせがまんしてたら。キリストの凄い言葉があるね。

「我よりも何々何々を愛する者は、我にふさわしからず」

と、親も子も妻も何もありはしない。実は、

「私を愛さなかつたら、他のこんなものをいくら愛したってダメだ」

と。「私を愛さなかつたら」というのは、

「私の愛を本当に受けとらなかつたら」

ということ。

「私の愛を本当に受けとつたら、他の人は、捨てたと思ったのが、全部愛せるよ」

ということなんだ、逆に言う。

「縦の関係が本当に立てば、横に広がらざるを得ないよ」

ということ。

「先生は縦ばかり言っているが」

と、そうじゃない。縦を言わなければ、本当の横にならないから、言っている。十字架の縦の線なんです。そうすると、十字架の横の線がでてくる。十字架そのものが表している、義と愛を。信と愛を。「神を信ずる」とは、

「神の愛を受けとる」

ことを「信ずる」という。何も「神さまが在る」ことを信じているのではない。信受、体受、体で受けとっていることです。だから、御霊の内容は、先ず愛であり、それから、うれしくてしょうがない。楽しい。

「アンディ・フロイデ」という、ベートーヴェンの第九シンフォニーがそうだね。歓喜の世界。あの艱難にあいながら、最後に、ベートーヴェンはシラーの詩を引用して、「歓喜の歌」を叫んだわけだ。

「友だちよ、讃美してくれ、喜劇は終わった」

(フライディテ・アミキ、コメディア・フィニタ・エスト)

と最後に言った。ダンテも、「喜劇」「ラ・コメディア」と言った。「デビナ」(神の)を付けたのは、後のボッカチオが付けたんだ。本当の悲劇を受けとった人が、しかしそれに勝つ



ているから、喜劇だと言う。ダンテもベートーヴェンも、

「苦しみを通して歓喜へ」（ドウルツヒ・ライデン・フロイデ）

と言う。それは、上から力をいただいているから、歓喜なんですよ。そうでなくて、やせ我慢で喜んでたつてしようがない。

だから、聖霊はそんな力があるから、愛の力であり、喜びを与えるものであり、本当の平安を与えるものである。

「何が起こつたつて大丈夫だ」

という世界を与えるもの。「平和」じゃダメだ。これは「平安」なんだ。こんな訳し方をされたら困る。共同訳でもやつぱり「平和」と書いてあるですか。まあ、そんなもんだな。「平和」と「平安」をはつきり区別する人が余りいないようだね。

●寛容・仁慈・善意

それから今度は、「寛容、仁慈、善意」。「善良」よりか「善意」の方がいい。善意がよく誤解されるんだよな、私なんかバカだものだから。

「またあんなふうにとつた。ああ結構だ、私は善意をもってやっているのに」

と。「寛容」、大きな気持。ドイツ語で「グロースムーツ」というんだけど、それから、「仁慈」、おもしろい。これが「怒」という。

「孔子の教えは、煮詰めると怒だ、おもしろいだ」

と。その人の立場になって、その人のことを思いやつて、そして、単なる同情じゃない。思い遣りも、キリストの思い遣りは力を与えるから、必ず力が伴う。空言でないですから。

「子曰く、参よ、吾が道は一以て之を貫く。曾子曰く、唯。子出づ。門人問ふて曰く、

何の謂ひぞや。曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ。」

孔子が弟子の参に言った。

「私の道はただ一つ、それで貫いている」

と。参は言った「唯」、分かりましたと。孔子がどこか外へ出ていった。他の弟子たちが、いったい何のことかと聞いた。参は言った、

「孔子の道は心からの思い遣りだ」と。

「孟子曰く。仁は人の心なり、義は人の道なりと」

（仁は人の安宅なり。義は人の正路なり。）

人の心の一番深いところは、仁である、愛である。人の踏むべき道は義であると。やつぱり、福音の世界の、キリストの光で読むと、面白ですよ、孔子でも孟子でも。彼らの言葉をちゃんとつと内容を凄いいものにしてしまう。

「寛容と仁慈と善意」をもって人に対する。これはみんな、愛から出てくる場所の対人関係なんです。縦の性格と、それから、横の対人関係のこと。



●忠信・柔和・節制

その次は、「忠信と柔和と節制」とある。「柔和」という字は「従う」ということ。「忠信」は、これは正に「信仰」です。信じて従順に従うのが「柔和」という字です。これはヘブライ語でもそうです。山上の垂訓のところの「柔和」というのもそういう角度です。

それから、「節制」は、自分の気持をちゃんとコントロールすること。中庸を得ることが「節制」です。行き過ぎも不足もダメ。「中庸」というのは、そういう意味で大事な言葉なんです。だから、最後の三つは心の状態、自分の内心の状態を言っている。こういうように——多少分析的ですけども——言っているのではないかと思う。聖霊には、上との関係の深いものと、それが人に対して現れる面と、それから、自分自身を本当に修めていく面と、そういうものを聖霊はちゃんと持っている。まだあるですよ、いくらでも。智慧の世界でも、力の世界でも。ただ、パウロは、ここではこれだけの事を言っている、というだけの話です。それは限定なんてできません。

コリント前書2章は御霊のことが書いてある、非常に大事な所です。

「4 わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり」(コリント前2:4)

必ずそういうような実力の証明によったと。そういう告白だ、教えているのではないぞと。それから、御霊が来れば何でも分かるぞと。

「14 性来のままなる人は神の御霊の事を受けず、彼には愚かなる者と見ゆればなり。また之を悟ること能わず、御霊の事は霊によりて弁うべき者なるが故なり」(コリント前2:14)

普通の人には聖霊のことは分からない、馬鹿だと見える。御霊を受けとらなければ、分からない。いくら説明したって、いわゆる説明ではどうにもならない。

「八万四千の法を説いても一つも説かなかつた」ということと同じことだ。

「15 されど霊に属する者は、すべての事をわきまう、而して己は人に弁えらるる事なし」(コリント前2:15)

仕方がない、躓かれる。だから、聖霊の世界は次元が違う。未だかつて聞かず、未だかつて見ざる世界。それが展開してくる。これはもう仕方がないね。

「人新たに生まれずば」

というのは、そのことなんだ。人新たに御霊を受けざれば、天国を知ることができない。だけれども、あなた方は——私は語りながら、あなた方は聞きながら——その世界に入っているから、楽しいわけです。



●詩「ペンテコステの歌」

最後に、私の作った「ペンテコステの歌」というのを歌います。

召団讃歌A46 「ペンテコステの歌」

(1986年5月3日作 旧制一高寮歌「混濁の波」の曲で)

- 1 時こそ満つれエルサレム 　ユダヤ全国各地より
人々の波ヨルダンに 　預言者の末裔ヨハネより
悔改めのバプテスマ 　受けんものぞと押せ来たる
- 2 パリサイ人もサドカイも 　もの見高にぞさし来れば
ヨハネ叫びて言ひけらく 　「蝮の裔よ汝らは
来たらんとする御怒を 　避くべきことのあるべきか
悔改めに應はしき 　果をこそ結べ、汝らは
われらの父にアブラハム 　ありと心に思はざれ
神はこれらの石よりぞ 　父祖の子らをも起すなり
「わが施すは先振れの 　水の洗礼、されど知れ
私より後に来たる人 　げに畏るべき神の人
燃ゆる聖霊のバプテスマ 　施す人ぞ彼に着け」
さはあれイエス北よりぞ 　ヨハネの許に來り給つ
ヨハネ驚き「こは如何に 　逆しらなるぞ止め給へ
「今は許せよ我はなす 　義しきことを身証せん」
キリスト・イエスヨルダンに 　全身を漬け立ち上る
見よ天開け聖霊が 　鴿の如くに舞ひ降りて
天より声あり「この人は 　わが愛しみ悦ぶ子！」
噫主イエスは叫びたり 　「我は火を地に投ずべし
み霊の火なり人よ知れ 　この火燃ゆれば何かせん
血のバプテスマ十字架を 　われ受けてのち火を投ず！」
主は十字架に死して後 　墓を蹴破り復活の
生命を現じ弟子どもに 　現はれて言つ「汝らは
祈りて待てよ、聖霊の 　バプテスマをば授くべし」
ペンテコステの日を迎へ 　集ひて祈る弟子どもに
烈しき風の吹く如く 　天なる響き堂に満つ
聖霊の火が人々の 　首に点りしバプテスマ！
使徒らの如く我々も 　十字架受けて聖霊の
受洗ありてぞ力あり 　無限無量のキリストを
一如になりて身証せん 　み霊の力 限りなし

